

本能寺蔵『落葉百韻』 訳注 (五)

伊藤伸江・奥田 勲

本稿は、京都の古刹本能寺が蔵する『落葉百韻』の訳注(五)である。この注釈は、『落葉百韻』訳注(一)から『落葉百韻』訳注(四)までと同じく伊藤が下原稿を作成し、奥田とのメール会議及び複数回の対面会議で意見交換、討議を行ない、その結果を完成原稿にまとめている。なお、この研究は科研費基盤研究(C)「心敬の文学作品における創造と新撰菟玖波文学圏への影響についての総合的研究」(研究代表者伊藤、研究分担者奥田)により行なっているものである。

凡例

一、底本は本能寺蔵某年十月二十五日賦何人百韻(『落葉百韻』)である。該本は他に写本の存在を聞かない孤本であるため対校本はない。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記にあらためて清濁を付した。原文は百韻の翻刻に示してあり、適宜参照されたい。原文の表記の誤りと考えられる箇所は改め、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句

には、校注者が括弧書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いている。校注者による改訂部分のうち、特記すべきものは、注釈内に付記した。

一、各句には、百韻全体の通し番号を句頭に示し、参考として、各懐紙内でのその句の所在を懐紙の順、表と裏の別、表裏ごとの句の番号で表し、前句を添えた。

一、語釈にあげる和歌、連歌例は、後述引用文献に依る。百韻の読解に有効な際には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。私に清濁を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名に改めた。

一、各句には、【式目】【作者】【語釈】【現代語訳】の説明項目を設けると共に、二句一連の連歌の中で句がどのように作用するか、及び独立した一句ではどんな意味を持つかに配慮し【現代語訳】の他に【付合】【一句立】の項目を設けた。さらに必要な場合には【考察】【補説】【他出文献】の項目も設けた。

※本訳注（五）の引用文献典拠一覽及び参考文献は、同時に刊行される『愛知県立大学 説林』六〇号掲載の「本能寺蔵『落葉百韻』訳注（六）付 考察及び式目表」にまとめて掲載する。参照を願うものである。

（三折 裏 八）捨つる身は木かけ岩がね宿として

七二 向かふも清く水に澄む月 伝芳

【式目】 秋（月） 水（水辺・用）

【作者】 伝芳

【語釈】 ●向かふ あるものに対し、眺めるさま。「雨に向ひて月を恋ひ」（徒然草一三七段）。「さやけさは誰が住む宿もかはらじと月に向かひて思ひこそやれ」（玉葉集・雑一・二九七三・平重村）。「月に向かふも涙落ちけり／人に添ふ心はかなく夢覚めて」（新撰菟玖波集・恋中・一七六九／一七七〇・寿官法師）。●水に澄む月 水面に澄んだ光を映し

ている月。真如の月を観想する月輪觀の面影があるか。「誠なき世のならひをも水に澄む月の光にたぐへてぞ見る」（続後拾遺集・釈教・一三〇三・前大僧正良信）。

【付合】「宿」に「月」を付け、水辺の近くに住む世捨て人が、月を見る情景とした。前句の「木かけ」や「岩がね」が水辺の近くの様となる。「宿トアラバ、月」（連珠合璧集）。

【二句立】月に向かえば、月は清らかに照り、水面に澄んだ光を映していることよ。

【現代語訳】（前句 世を捨てた出家のこの身は、木陰やごつごつした岩をすみかとしていて。）そんな住みづらいいどい住みかでも、月に相対すると、月は清らかに照り、水面に澄んだ光を映していることよ。

（三折 裏 九）向かふも清く水に澄む月

七三 秋かけて網代を守る川の瀬に 利在

【式目】 秋（秋） 川（水辺・体） 瀬（水辺・体）

【作者】 利在

【語釈】 ●秋かけて 秋になって。秋になったというので。「ふりにけり時雨は袖に秋かけていひしばらくを待つとせしまに」（新古今集・恋四・一三三四・皇太后宮大夫俊成女）。「声うちしきり松風ぞ吹く／蟬の鳴かたつ山里秋かけて」（心玉集・一〇五八／一〇五九）。「かけて」という語句は、「告げて」という語義を持ち、音を発するものが「時を告げて」との意味であり、「くかけて」という語句を持つ歌には、音を発するものに加え、音を発しないものも次第に詠みこまれてくるようになり、「かけて」の意味が不明確になるにいたった（↓参考文献巖佐氏論文。利在の句には、例にあげた歌句のような「かけて」とよく使われる音を表わす素材が詠まれていない。また、「網代」は語釈に述べるように晩秋から冬の景物であり、「秋かけて」の語意とはかみあいにくい。●網代 川魚を取る仕掛け。川の上流に向け、杭を打ち、竹や柴を組んだ簀（す）を置いて、魚を取る。「網代を守る」とは、夜にかがりをたいて網代を見守ること。

「網代」や「網代守」は『連珠合璧集』では「冬の心」に分類されているが、心敬の頃には晩秋にも詠まれている。「木を切る音の信楽の里／網代打つ田上川の末の秋」（竹林抄・秋・五二一・智蘊）。「秋さむき田上川の網代守／葦のまろやは露もたまらず」（小鴨千句第四百韻・八三／八四・之好／圭承）。

【付合】水面に映る月を網代を守る番人の目に映った景とする。仏教的な観想の世界と殺生の業を対比させたか。

【二句立】秋になって、網代の見張りをしている川の瀬に。

【現代語訳】（前句 見ると月は、水面に清く澄んだ光を映していることよ。）秋になって、月の清く映る川瀬で網代を見張っている。

（三折 裏 十）秋かけて網代を守る川の瀬に

七四 薄霧白き田上の郷 立承

【式目】 秋（薄霧） 薄霧（聳物） 田上（名所）

【作者】 立承

【語釈】 ●田上 近江国栗太郡、現在の天津市南部にある、瀬田川の東方の地。信楽に源を発する田上川（大戸川）が瀬田川に流れ込む。「月影の田上川に清ければ網代に氷魚のよるも見えけり」（拾遺集・雑秋・一一三三・清原元輔）。「やなくづれ鮎はしる瀬は岩間にて／もる田上の郷の人をと」（顕証院会千句第三百韻・九九／一〇〇・宗砌／圭（盛滋））。

【付合】前句の川を、網代で氷魚を取るのが有名な田上川とした。田上川は田上山の砂を流し出しているため、浅瀬を多く持つ。『堀河百首』にも「網代」の題で田上川が多く詠まれている。「氷魚トアラバ、網代 田上河」（連珠合璧集）。

【二句立】薄霧が白くかかる田上の郷。

【現代語訳】(前句 秋になって、網代の番をしている、その川瀬には、薄い川霧が白くかかる田上の郷である。

(三折 裏 十一) 薄霧白き田上の郷

七五 衣手にあさけの霜やまよふらん 隆蓮

【式目】 冬(霜) 霜(降物)

【作者】 隆蓮

【語釈】 ●衣手 着物の袖。「衣手トアラバ、袖同也」(連珠合璧集)。●あさけ 「朝明け」の約から、朝、夜が明けそめるころ。「秋たちて幾日もあらねばこのねぬる朝けの風は袂さむしも」(万葉集・秋雑・一五五九・安貴王、拾遺集一四一に再録、ただし第二句「いく日もあらねど」第五句「たもとすずしも」。「水ぐきのをかのやかたにいとあれと寝ての朝けの霜のふりはも」(古今集・大歌所御歌・一〇七二)。「冬がれの朝けの霜も白妙の袖に色なきま野の萩原」(耕雲千首・原寒草・五三二)。●霜まよふ 霜があたりがわからなくなるほどひどく降る状況。「霜迷ふ空にしをれしかりがねのかへるつばさに春雨ぞ降る」(新古今集・春上・六三・藤原定家)。「朝まだき峯の梯かすむなり遠方人に霜迷ふらん」(心敬集・橋霜・三九五)。「薄散る夕の原の寒き日に／袖より霜や置まよふらん」(年次不詳何船百韻「散しえぬ」・二二／二二・心敬／行助)。

【付合】 前句の「田上」に地名「田上」の枕詞である「衣手」を付けた。「衣手の 田上山の 真木さく 檜のつまでを もののふの 八十宇治川に 玉藻なす 浮かべ流せれ」(万葉集・卷一・五〇・藤原宮の役民が作る歌)。また、ここは「霧」に「霜」を付けている。「霧」に降物は可嫌打越物であるが、この百韻では「霧」と降物が連続することは認められているようである。例えば第八句「霧降る野路の末のはるけさ」には第九句「かきくらす雪にや里もかすむらん」を付けている。

【二句立】 着物の袖には、夜明け方の霜がまっ白になるほど多く置いてあるのだろうか。

【現代語訳】（前句 薄い霧が白くかかっているここ田上の郷。）着物の袖には、夜明けの霜がまっ白になるほどに置いているのであろうか。

（三折 裏 十二）衣手にあさけの霜やまよふらん

七六 道行く人のわくる冬の野 円秀

【式目】 冬（冬の野） 人（人倫）

【作者】 円秀

【語釈】 ●道行く人 道をたどる人。「夏山の影をしげみやたまほこの道行く人も立ちとまるらん」（拾遺集・夏・一三〇・紀貫之）。「はなをえに道行人のあふちかな」（法眼專順連誦・二三五）。●冬の野 冬野は朝夕に霜が降りることが詠まれる。「あさまだきまだ霜消えぬ浅茅原冬野の草は末ぞ悲しき」（拾玉集・朝野寒草・三三二五）。「からくれなゐを撫子の色／朝ぼらけ深き冬野の霜解けて」（石山四吟千句第一百韻・三三二／三三三・大覚寺義俊／紹巴）。

【付合】 「衣手」を冬の野の道を行く人のものとして付けた。

【一句立】 道をたどる人がわけて進んでいく冬の野原。

【現代語訳】（前句 着物の袖には、夜明けの霜がまっ白になるほどに置いているのであろうか。）そんなふうには寒そうに、道をたどる人がわけていく冬の野原の様子。

（三折 裏 十三）道行く人のわくる冬の野

七七 枯れてだに草の色もかくろはで 伝芳

【式目】 冬（枯れ）

【作者】 伝芳

【語釈】 ● 枯れてだに 枯れていてさえ。 ● 草の色も 「草葉の色も」であろうか。「草葉の色」は、一般に枯れて茶色になる前の緑色の時期を表現し、春のあざやかな色が詠まれることが多い。「春はいまだ草葉の色もあさみどり霞ぞ深き武蔵野の原」(範宗集・一一六)。「初霧わたる野こそ遠けれ／雁ぞ鳴く草葉の色やかはるらん」(行助句集・一五九／一六〇)。または「草木の色も」か。「心とめて草木の色もながめおかん面影にだに秋や残ると」(玉葉集・秋下・暮秋十首歌たてまつりし時・八三二・京極為兼)。 ● かくろはで 隠れたままでいいないで。「隠ろふ」は「隠る」に接尾語「ふ」が接した「隠らふ」の転。「隠ろはで」は『新編国歌大観』、『新編私家集大成』を検しても見えない。「隠ろふ」が否定形として用いられるのは一般的でないのを、あえて用いているのは古雅な趣を出そうとしたのか。「隠ろふ」の例としては「星みゆる夏毛の鹿のかくろひて富士の裾野に繁る高草」(建長八年百番歌合・八六九・衣笠家良)「あたため酒に指をこそさせ／竹の葉にをしへし宿はかくろひて」(心敬句集菩提・二一一七／二一一八)。

【付合】 枯れて半ば倒れた草には、人の姿も隠れることもないが、草の中にもまだ青い色が残っているとされている。枯れた冬野はうら寂しく、寒々としたものであるが、あえてそこに草の色を見、句境転換の契機とした。

【二句立】 枯れていてさえも、草の色も隠れてしまわず、青い色が残っていて。

【現代語訳】 (前句) 道行く人がわけて進んでいく冬の野原。(その野原は、枯れていてさえも、草の色も、そこをわけ行く人の姿同様に隠れてしまわず、青い色が残っていて)。

(三折 裏 十四) 枯れてだに草の色もかくろはで

七八 心の種ぞさまざまにある 有実

【式目】 雑(心の種)

【作者】 有実

【語釈】 ● 心の種 人間の心中の思い。「やまと歌は人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける」(古今集仮名

序)。「春はまづ人の心を種とてや冬野の草の下にもゆらん」(拾塵集・八八〇・寒草)。「世世朽ちぬ心の種のあひ生はしるや住の江高砂の松」(心敬集・松契齡・三〇二)。**●**さまざまにいろいろと。「さまざまに千々の草木の種はあれど一つ雨にぞ恵みそめぬる」(玉葉集・釈教・葉草嘯品の心を詠ませ給うける・二六四九・崇徳院)。

【付合】前句の「草」に「種」を付けた。前句の「草」は、心の「種」から生えた、さまざまな思いであると解せる。

【二句立】人の心の物思いの種はいろいろあるのだ。

【現代語訳】(前句 枯れていてさえも、草の色も隠れてしまわず、青い色が残っている様子であつて。)草の種だけでなく、心の思いの種もいろいろとあるのだ。

(名残折 表 一) 心の種ぞさまざまにある

七九 さらば又恨みもはてぬ物思ひ 立承

【式目】恋(恨み・物思ひ) 「恨み・恨む」如此云かへて二句、他准之(一座二句物)

【作者】立承

【語釈】**●**さらばまた それでまた。そんなふうであるならまた。「さらばまた桜に匂へ梅の花」(大発句帳・春・四〇九)。**●**恨みもはてぬ (あの人の愛情のなさを) いくら恨んでも恨みたりない。「つれなさを恨みもはてぬしのめにとりあへぬまでおどろかすらむ」(源氏物語・帚木・光源氏)。

【付合】「心の種」が「物思ひ」を発現させる。「かくばかりなぐさめ草の種よりいかで咲くらむ物思ひの花」(なぐさみ草・四三・正徹)。

【一句立】そんなふうでまた、恨んでも恨みたりない物思いとなる。

【現代語訳】(前句 人の心の物思いの種というのいろいろあつて。)そうするとそれはまた、恨んでも恨みたりない物思いになるのだ。

(名残折 表 一一)さらば又うらみもはてぬ物思ひ

八〇 霞むも悲ししのぶ夜の月 心敬

【式目】春(霞む)・恋(しのぶ) 霞む(春の心) 忍ぶ夜(夜分) 月(光物) 月与月(可隔七句物)

【作者】心敬

【語釈】●霞むも悲し 霞んでいるのも悲しいことだ。月が霞むと、実のない男はそれを口実にやって来ない。「朝ほらけ霞むもつらし別れてはいつかあはづの船の行末」(心敬集・湖上朝霞・一〇二)と心敬自身の和歌にもあるように、「霞むもつらし」が普通であり、「かすむも悲し」は珍しく、和歌にも連歌にもこの句しか管見に入らない。「霞むもつらし」であるならば、一縷の望みを残した女性の思いとなるが、「霞むも悲し」では、より絶望の程度が強くなり、前句で表現されたはなはだしい恋の悲しみと釣り合いの取れる、あきらめざるを得ない女性の恋の句となる。●しのぶ夜の月 あの人を訪ねようとする夜に出ている月。「忍ぶ夜の道さまたげの霞ゆゑそこと知らねば行く空もなし」(基佐集・しのびまどふこひを、かすみによせて・二五八)。「いとふとや思ひをあきやたづぬらむ／あやになれや忍ぶ夜の月」(太神宮法楽千句第一百韻・二五／二六・宗長)。

【付合】「はてぬ」に「霞む」を付ける。前句では、待つ身の女性の悲痛な心情であるが、そこから離れるために、付句では通う側の男性の行動に思いを馳せ、また一句で春の物思いと取れる形にする。一句では、女性を訪ねるのを躊躇する男性の句であり、付合では、男性のそうした行動により、訪ねることができないからあらたに悲しみを誘われる女性の姿を表現する。

【二句立】春の霞に月が霞んでいるのも悲しいことよ。恋人を訪ねようとする夜の月が霞んでしまつて暗いと、恋しい人を訪ねることができない。

【現代語訳】(前句 そんなふうであるならまた、それは待つ側の恨んでも恨みたりない物思いとなる。)春の霞に月が霞んでいるのも悲しいことよ。恋人を訪ねようとする夜の月が霞んでしまつて暗いと、それをいいわけに恋しい人は

訪ねてこないのだ。

（名残折 表 三） 霞むも悲ししのお夜の月

八一 春の来て何に涙の落ちぬらむ 伝芳

【式目】 春（春の来て） 涙与涙（七句可隔物）

【作者】 伝芳

【語釈】 ●春の来て 春が来て。春の到来により新たに明るい光景が眼前に現出することは、新古今時代の歌人に詠み試みられた。勅撰集では風雅集初出であり、後には正広がよく使うが、この句のように春愁の気持ちにより、涙を流すという語句が後に続くのは珍しい。「春の来て梅さくやどのなさけかな月影かをる有明の空」（拾玉集・春・二六〇二）。「我が宿をとふとはなしに春の来て庭にあとある雪のむら消え」（風雅集・雑上・一四一五・夢窓国師）。「春の来て人のたちぬふわざなれば霞の衣ひまやならん」（松下集・霞春衣・二六三九）。「なやらふ夜半にとしは暮けり／春の来てひいな遊はよもあらじ」（宝徳四年千句第七百韻・五六／五七・宗砌／賢盛）。なお、「冬のきて」が第三句にある。●何に なんのために。「思はじと思ひとりても立ちかへり何に涙の又こぼるらむ」（文保百首・七八四・西園寺公顕）

【付合】「霞む」に「春」がつく。付句により、前句の「霞むも」が霞でかすむだけでなく、涙で目がかすんでということになる。前句は、「忍ぶ」を密かに恋慕う感情と捉えると、来ない男性の訪れを待つ女性の句。七九、八〇の恋の風情に重なりつつ離れて、春愁の句に仕立てているか。

【一句立】 春がやってきたというのに、どういうわけで涙が落ちるのだろうか。

【現代語訳】（前句 春の霞に霞んで見えるだけでなく、涙でかすんで見えるのも悲しいことよ。訪れてくれないあの人を思いながら見る夜の月が。）春がやってきたというのに、どういうわけで涙が落ちるのだろうか。それは、つれない

あの人を恋い慕っているためなのだ。

（名残折 表 四）春の来て何に涙の落ちぬらむ

八二 身を知る人はのどかにもなし 毘親

【式目】 春（のどか） 身（人倫） 人（人倫）

【作者】 毘親

【語釈】 ●身を知る 我が身がはかなく取るに足りないありさまであることを知っている。「数々に思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる」（古今集・恋四・在原業平・七〇五、伊勢物語一〇七段）より来る詞であり、元来は、恋人に大切に思われていない我が身を痛感し、悲しみに涙する状況を表現する詞。「わすらるる身を知る袖の村雨につれなく山の月はいでけり」（後鳥羽院御集・遇不逢恋・一五八二）。「数ならぬ身を知る袖の涙とも月より外はたれかとふべき」（新後拾遺集・秋下・三八一・法眼慶融）。「身を知る人」は、和歌では二例、連歌では管見では看聞日記紙背連歌に三例とこの一例。「つくづくと日をふるさとの春雨や身を知る人の涙なるらん」（為忠家初度百首・閑中春雨・六九・藤原顕広（俊成））。「霞みては空高からず降雨に／身を知る人や世をいとふらん」（看聞日記紙背永二九年三月二八日何人百韻・一九／二〇・行光／善喜）。応永期には、「身を知る人」は、わが身のはかなさを思い知り、世をすてる気持ちを抱くとの理解がある（「身を知る人」連歌用例）。「身を知る」の意味は、このように恋の意識から離れてきており、それをもとに毘親の句は作られたか。●のどかにもなし 穏やかな気持ちでもない。春の気持ちのどかではないという発想は、花を惜しむ気持ちゆえからと、古来業平歌でよく知られる。「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」（古今集・春上・五三・在原業平、伊勢物語八二段）。「桜は咲けどのどかにもなし／花よなご風も吹あへずならふらん」（壁草（大阪天満宮文庫本）・一八七／一八八）。

【付合】 前句は一句では春なのに愁いを感じることはいぶかしむ人の気持ちとなり、付句で、愁いを感じてをす

なわち「身を知る」こととして、「身を知る」人物の心中を付度する。「涙」から「身を知る」を出し、春の愁のイメージから付句に「のどか」を出す。

【一句立】我が身がはかなく取るに足りないと知っている人は、のんびりと世をすごす気持ちでいるわけではない。

【現代語訳】（前句 春がやってきたというのに、どういうわけで涙が落ちるのだろう。）我が身がはかなく取るに足りないと知っている人は、穏やかな気持ちで世をすごしているわけではない。その悲しみゆえに涙が流れるのだ。

（名残折 表 五）身を知る人はのどかにもなし

八三 世の中を明日と頼むはおろかにて 心敬

【式目】 雑 世只一 浮世世中の中に一 恋世一 前世後世などに一（一座五句物） 今日に昨日、明日（可嫌打越物・新式今

案）世と浮世世中（可嫌打越物・新式今案）

【作者】 心敬

【語釈】 ●世の中 この世。●明日と頼む 明日があると頼みにする。「このうさに猶ながらふるつれなさは明日とたのめばまたや待たれん」（親子集・恋・三六）。「明日ありと思ふ心にはだされてけふもむなく暮しぬるかな」（源承和歌口伝・二八五・源承）●おろかにて 愚かなことであつて。「せめて身を知るとやいはん愚にて世にありふるをなげくところは」（亜槐集・雑上・一〇九〇）。

【付合】 前句の「身を知る」を、いつ死ぬともされないわが身の上を理解しているとり、無常の世の認識を付ける。「うつつなき身を知る人やつきもせぬ本の命に立ち帰るべき」（他阿上人集・無常・一一五〇）。「のどか」から「世の中」を出した。八一、八二に流れる春の愁の気持ちから、伊勢物語の業平歌を思い、その詞を表に出してつなく。「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」（古今・春上・五三・在原業平、伊勢物語八二段）。さらに、また「世の中」を「男女の仲」と考えた場合、雨が降りそうなので訪れるのを翌日のばしにしようとする男のイメージを考

えることができ、伊勢物語一〇七段の逸話をふまえた付合となる。

【二句立】常ならぬこの世の中を、明日があるからと頼みにしてうかうかとすごすのは愚かなことであつて。徒然草一八八段の登蓮法師の逸話や一八九段を思わせる。「人あまたありける中にて、ある者「ますほの薄、まそをの薄などいふことあり。渡辺なる聖、此事を伝へ知りたり」と語りけるを、登蓮法師、其座に侍けるが聞きて、雨の降りけるに、「蓑、笠やある。貸し給へ。かの薄の事習ひに、渡辺の聖のがり尋ねまからむ」と言ひけるを、「余りに物騒がし。雨止みてこそ」と人の言ひければ、「むげのことをば仰せらるる物かな。人の命は雨の晴れ間をも待つ物かは。我も死に、聖も失せなば、尋聞きてんや」とて、走り出でて行つつ、習ひ侍にけりと申伝たるこそ、ゆゆしくありがたく覺ゆれ。敏時はすなはち効ありとぞ、論語と云文にも侍なる。此薄をいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因縁をぞ思ふべかりける。」（徒然草一八八段）。「今日は其事をなさむと思へど、あらぬ急ぎ先出で来てまぎれ暮し、待つ人は障りて、頼めぬ人は来り、頼みたる方のことは違ひて、思ひ寄らぬ道ばかりは叶ひぬ。（中略）かねてのあらまし、皆違ひゆくかと思ふに、をのづから違はぬこともあれば、いよ／＼物は定がたし。不定と心えぬるのみ、まことにて違はず。」（徒然草一八九段）。

【現代語訳】（前句 わが身が何時どうなるかもわからないということを知っている人は、のんびりともしていない。）常ならぬこの世の中を、明日があるからと頼みにしてうかうかとすごすのは愚かなことであつて。

（名残折 表 六）世の中を明日と頼むはおろかにて

八四 光のかげを惜しみとめばや 有実

【式目】 雑 影に影（可嫌打越物）

【作者】 有実

【語釈】 ●光のかげ 「光陰」を訓読し、和らげた語。月日、時間。「さもあらばあれとてなどか急ぐらむ／光の陰ぞ

人を思はぬ」（竹林抄・雑上・一二三七・心敬。「惜しむにも光の陰はとどまらで／果てぞ我が身の年の暮なる」（新撰菟玖波集・冬・一二八二／一二八三・近衛政家）。

【付合】明日があると頼みにすることのおろかさを読む前句に、月日の流れをとどめたいといふかなわぬ思いを付けた。前句は常ならぬ世を意識することを説くのに、付句は常ならぬことを変えたいといふ。前句の真意を理解していない付句といふべきであるが、明日を当てるに暮らす愚かさを諭す前句に、それならば明日が来ないように時を止めたいものだと論しに逆らってみせた諧謔の付合とも考えられるか。

【二句立】月日が過ぎるのを惜しみとどめたいものだ。

【現代語訳】（前句 常ならぬこの世の中を、明日があるからと頼みにしてうかうかとすごすのは愚かなことである。）それならば、過ぎる月日を惜しみとどめたいものだ。

（名残折 表 七）光のかげを惜しみとめばや

八五 暮れわたる窓よりをちに飛ぶ蛩 隆蓮

【式目】夏（蛩） 夜分（蛩） 蛩（一座一句物） 窓（居所・体）

【作者】隆蓮

【語釈】●暮れわたる あたり一面完全に暮れてしまった。この語は、空や海など広々した遠景を詠む語であり、この句で「窓」が続くのは少し違和感がある。勅撰集では『新統古今集』が初出と和歌への登場は遅い。「暮わたる峯の松原ほのぼのと木のましられて月ぞいざよふ」（新統古今集・雑上・松月幽・一七一五・藤原公綱）。「くれわたる池の水かげ見えそめて蛩も深き思ひにぞ飛ぶ」（続垂槐集・一五七・同（享徳二年）四月廿一日、室町殿太神宮法楽百首御統歌に、蛩知夜）。「旅行く方の暮れわたる空／出がての月に宿とふ野は遠し」（年次不詳何路百韻「白妙の」・四／五・広行／理永）●をち 遠方。近景を通して光が遠方に見える句に「色さびしほのめきのこる入日影／浦より遠の海士

のもしほ火」（宝徳四年千句第五百韻・一一／一二・利在／超心）、「床寒げなる雪のむら鳥／風渡る竹より遠の暮るる日に」（竹林抄・雑上・一一二六・能阿）などがある。

【付合】前句の「光」を蛍と見、その影を惜しむとして付けた。「草深き窓の蛍はかけ消えてあくる色ある野辺の白露」（玉葉集・野亭夏朝・三九八・飛鳥井雅有）。

【二句立】とつぷりと暮れた外を窓から見ると、遠くに飛んでいる蛍の光がある。「空夜に窓閑かなり蛍渡つて後深更に軒白し月の明らかなる初め」（和漢朗詠集・夏夜・一五二・白居易）の面影があるか。僧たちは漢詩句の教養を保持していたと考えるべきであろう。

【現代語訳】（前句　すぐに消えるその光を惜しみとどめたいものだ。）とつぷりと暮れた窓から見ると、遠くに光って飛んでいる蛍が見える。

（名残折　表　八）暮れわたる窓よりをちに飛ぶ蛍

八六 秋風吹くと竹ぞそよめく　利在

【式目】 秋（秋風）　竹に草木（可嫌打越物）

【作者】 利在

【語釈】 ●秋風吹くと「秋風が吹いている」と。伊勢物語の和歌「ゆく蛍雲の上までいぬべくは秋風吹くと雁につげこせ」（伊勢物語四五段、後撰集・秋上・二五一・在原業平）による。秋が来たことを知らせる言葉である。「とぶ蛍光は雲の上ながら秋風吹くとつげのをまくら」（草根集・一九四〇・永享五年四月七日詠）。 ●そよめく　そよそよと音をたててそよぐ。ここは、竹が「秋風吹く」ということをそよめいて告げる。「人のそよめきて参る気色のありければ」（今昔物語・卷二七ノ二）。和歌では萩に使われる言葉である。「草葉そよめく五月雨の頃／さ男鹿の渡る野原に日は暮れて」（竹林抄・雑上・一〇九六・宗砌）、「萩のそよめく夏の夕ぐれ／浜風に葦かる舟やさはるらん」（行助句集・

四五二／四五二。

【付合】「蛩」に「秋風」、「窓」に「竹」を付けた。「蛩トアラバ、秋風」（連珠合璧集）。「竹トアラバ、窓」（連珠合璧集）。遠景の蛩の光と、近景の竹の葉音の対比である。両句の關係は、夏の終わりの蛩に、もう秋になって秋風が吹いているよと竹が知らせていることになる。この時、付合での蛩は初秋の蛩となる。「秋の始めの心ナラバ、蛩（秋の詞を入れて）」（連珠合璧集）。

【一句立】「秋風が吹いてきたよ。」と、竹がそよそよと告げていることよ。前の句にひきつづき、「風の竹に生る夜窓の間に臥せり 月の松を照らす時台の上に行く」（和漢朗詠集・夏夜・一五一・白居易）の面影がある。

【現代語訳】（前句 とつぷりと暮れた窓から見ると、遠くに飛んでいる蛩の光がある。）「秋風が吹き始めたよ（もう秋がやってきたよ）」と、竹がそよそよと音を立てて、蛩に告げていることよ。

（名残折 表 九）秋風吹くと竹ぞそよめく

八七 うちなびく園の柳の散りそめて 三位

【式目】秋（散りそめて）園（可嫌打越物・新式今案）柳 只一 青柳一 秋冬の間一（植物・一座三句物）木与木（可隔五句物）園（居所・用）※「庭 そとも已上如此類用也」（応安新式）から、用と推定。

【作者】三位

【語釈】●うちなびく なびく。「うちなびく柳の糸のわきてまたいかなる風にむすほほるらむ」（千五百番歌合・春二・二六四・源通光）。「柳トアラバ、なびく」（連珠合璧集）。●散りそめて 散り始めて。「末葉より一むら柳散りそめて／よはく吹くとも風ぞしらるる」（永原千句第九百韻・五三／五四・定秀／紹永）。

【付合】前句の「竹」に「園」を付ける。

【一句立】風になびく園の柳が散り始めていて。

【現代語訳】（前句 秋風が吹き始めたことを知らせるように、竹がそよめいている。）その風になびく園の柳は散り始めていて。

（名残折 表 十）うちなびく園の柳の散りそめて

八八 通へば露の消ゆる道の辺 正頼

【式目】 秋（露） 露（降物） 露如此降物（可隔三句物）

【作者】 正頼

【語釈】 ●道の辺 道端。道のほとり。「道の辺の朽木の柳春くればあはれ昔と忍ばれぞする」（新古今集・雑上・柳を・一四四九・菅原道真、新撰朗詠集・春・柳・一〇〇）。「道の辺に清水流るる柳陰しばしとてこそ立ちどまりつれ」（新古今集・夏・二六二・西行）。「なかか長くてつらき玉のを／道のべの花を柳や隔つらむ」（行助句集・一五五五／一五五六）「たれかとはむ霞む山陰／道の辺の柳木深く梅ちりて」（老葉（吉川本）・春・二二／二二）●通ふ 繰り返し通る。男性が女性のもとに通う際にも用いる語で、恋の面影が添う語。

【付合】 「柳」に「道の辺」を付け、「散り」の縁から「露」を出した。

【一句立】 通うたびに触れて露がこぼれて消える道のほとり。

【現代語訳】（前句 風になびく園の柳は散りはじめていて。）この道を通っているうちに秋になった。通うたびに触れて露がこぼれて消えるこの道のほとり。

（名残折 表 十一）通へば露の消ゆる道の辺

八九 さを鹿や山のふもとを出ぬらむ 貞興

【式目】 秋（さを鹿） 鹿 只一 鹿子一 すがる一（一座三句物） 山（山類・体） ふもと（山類・体）

【作者】 貞興

【語釈】 ●さを鹿 牡鹿。「さをしかのやまよりいづる声はして／わけぬに露はなに乱らむ」（石山四吟千句第一百韻・二二／二二・大覚寺義俊／三条西公条）。

【付合】 前句において、道のほとりの露が消えるとしたのを、鹿が通ったためかと推定の句を付けた。

【二句立】 牡鹿が山を降り、もうふもとから出たのだろうか。参考『寛正六年正月十六日何人百韻』訳注の第四一句にて鹿の生態の説明をなしている。

【現代語訳】（前句）鹿が通うたびに、道のほとりの草葉の露がこぼれて消える、この様子では）牡鹿はもう山のふもとから里へ出てきたのだろうか。

（名残折 表 十二）さを鹿や山のふもとを出ぬらむ

九〇 田をもる声ぞ月に聞こゆる 毘親

【式目】 秋（月） 月（光物） 月与月（可隔七句物） 田与田（可隔七句物） 夜分

【作者】 毘親

【語釈】 ●田をもる声 田の番をする声。「もる」は秋の田を仮庵をつくって見張ること。「さをしかの秋の草ふし夜かれしでもる声たかき野田の仮庵」（草根集・巻五・田辺鹿・三六一五）。「もる声」がどのような声か不明だが、田の番人が鹿や猪などを追ひ払う声であり、「田守のもの追ひたる声、いふかひなく情けなげにうち呼ばひたり」（蜻蛉日記）と、都人には無風流で興ざめなものと感じられていた。「もる声」については、『寛正六年正月十六日何人百韻』の第一三句注にても考察した。

【付合】 鹿が夜、山からふもとに降り、さらに田に入り込んで作物を荒らすため、夜通し田の番をする声がすると付けた。

【一句立】 田の稲を守る声が、月の光の中に聞こえる。

【現代語訳】(前句 牡鹿がもう山のふもとを出てきたのだろう。) 月の光の中、稲を荒らす鹿を追い払うためにあける田の番の音が聞える。

(名残折 表 十三) 田をもる声ぞ月に聞こゆる

九一 さ夜ふかき湊の舟に人は寝て 心敬

【式目】 雑 夜分(さ夜) 湊(水辺・体、一座二句物) 舟(水辺・用、後に体用之外(新式今案))

【作者】 心敬

【語釈】 ●さ夜ふかき 「さ夜に小字嫌、不得心。さ字やすめ字歟。三三更^{サヨラゲ} 佐夜中山など云、小字あらず。」(私用抄)。

●湊の舟 河口に停泊している舟。「今日もなほ湊の舟の出でかねて／海士の袖とや波に朽つらむ」(看聞日記紙背応永十五年七月廿三日何船百韻・七一／七二・□／貞成親王)。
●人は寝て 人は寝ていて。「山里のさやけき月に人は寝て／風や木の葉の衣打つらむ」(竹林抄・秋・四九七・行助)。「しづけき時は心すみぬる／更るまでながむる月に人は寝て」(心玉集・秋・一〇七二／一〇七三)。「人ハねて：「よぶ舟に何辺の村の人ハねて」(信照)」「(連歌詞)

【付合】 陸の上、田のあたりでは、動物を追い払う声があるが、湊の舟のあたりでは、誰も起きておらず、静かであると、前句と付句とでくつきりと対比している付け。八九、九〇と深山から山の麓、そして里の田へと移動してきた視点で、ここで里を過ぎて河口に到達した。

【一句立】 夜更け、河口に停泊している舟の中では、舟人は寝静まっています。

【現代語訳】(前句 月の光の下、田の番をする声が聞えているが、) そんな夜更けに、河口に泊まっている舟の中では、舟人は寝静まっています。

（名残折 表 十四）さ夜ふかき湊の舟に人は寝て

九二 一人ある身のあし火たく影 伝芳

【式目】 雑 葦火（水辺）※『梅春抄』には「藻塩火」が水辺の用とあり、火ということから葦火も水辺の用か。

葦火に水辺（可嫌打越物・肖柏追加） 影に陰（可嫌打越物）

【作者】 伝芳

【語釈】 ●一人ある身 ひとりぼっちの身。「秋萩の下葉色づく今よりや一人ある人のいねがてにする」（古今集・秋上・二二〇・題知らず・詠み人知らず）。「夕されば人まつむしのなくなへにひとりある身ぞ恋ひまさりける」（古今和歌六帖・まつむし・三九九五・紀貫之）。「草の庵とふべきころの萩咲て／ひとりある身の袖を見せばや」（寛正五年十二月九日何路百韻・三三三／三四・専順／頼宣）。●葦火 葦を燃料にして焚く火。「難波人葦火たく屋のすしてあれどおのが妻こそつねめづらしき」（万葉集・二六五九）。「朝なぎの浦に塩干の雪消えて／葦火たくやと先知らるらん」（小鴨千句第六百韻・四一／四二・日晟／之好）。「霧にしめるか葦火たく影／つくろふはよそめばかりの草の庵」（石山四吟千句第四百韻・九二／九三・大覚寺義俊／三条西公条）。「離れ小島に葦火たく影／飛ぶ蛸行かたもなくさよふけて」（壁草（続群書本）・夏・四五二／四五二）。

【付合】 湊に停泊している舟では皆寝ているが、岸には一人だけ寝られない人がいるという対比。

【一句立】 一人きりで葦火を焚いている、その光が見えることだ。

【現代語訳】（前句 夜更け、河口に停泊している舟の中では、舟人は寝静まっています。）一人だけが岸辺で葦火を焚いている、その光が見えることだ。

A translation and an annotation of Ochiba-haykuin in the possession of Honno-ji V

ITO Nobue · OKUDA Isao

Abstract

This paper is a translation and an annotation of Ochiba-hyakuin, which is in the collection of an ancient temple Honno-ji.

For each poem from the 72nd to 92nd, we show the rule for making rengas (shikimoku), meanings of terms, a translation of the poem, and one under the combination with the former one, and finally we give an interpretation to it.

This is a joint work by Ito and Okuda.